文学・芸術・文化　9巻2号　1998. 3

漱石『こころ』とアンドレーエフ『ゲダンケ』との比較文学的研究

河　村　民　部

今ではおそらくその名前さえ忘れ去られてしまっているのではないかと思えるのが、ロシアの小説家であり劇作家であったレオニード・ニコラエヴィッチ・アンドレーエフ（1871－1919）である。

筆者がアンドレーエフの名前を知り彼の小説をいくつか読むきっかけとなったのは、漱石を通してである。漱石がアンドレーエフ（漱石はアンドレーフと綴っているが以後アンドレーエフとする）に言及したのは、『それから』（明42）における『七死刑囚物語』（1908）（漱石は『七刑人』と訳している）が最初ではなかったかと思う。この小説は『新潮世界文学辞典』によると、「すぐれた作品で、今日もなお高く評価されている。これは絞首刑に処せられる七人の男女革命家の獄中と法定での生活を、特に心理的側面から追及したもので、革命家たちの風貌が鮮やかに描きだされている」とある。

恥を晒すようだが、筆者は漱石の『それから』における『七死刑囚物語』への言及を読んだときには（『それから』は何度か繰り返し読んでいるにも関わらず）さらりと読み飛ばして、アンドレーエフなんてものにはあまり関心を払わないできた。ところが同じく漱石の『彼岸過迄』を読み、さらに『こころ』を読むうちに（これらの作品も何度となく繰り返し読んでいるにも関わらず）アンドレーエフという小説家とその作品は漱石の小説にとって筆者が想像していた以上に、深く重要な意味を持っているのではないかと思うようになった。それを跡付けようというのが本論の主旨である。

まずは『それから』の『七死刑囚物語』についてであるが、父の薦める佐

川の娘との縁談を前にして、主人公代助が「薄い洋書」(四)[1] で読むのがこの小説である。周知のようにこの縁談は「先祖の拵らえた因縁」(同) に基づくものであり、代助の父とその兄がやむをえず人を斬ったあとの切腹を、かつて救ってくれた命の恩人の孫娘がその相手ということになっていて、話は死に関わる血なまぐさいコンテクストを持っている。

己の繊細で優美な肉体を誇りとしながら、外界からのちょっとした刺激にも敏感に反応し怯まずにはいない代助が、己の人工世界を造ってバリアーを張り巡らし、その中に暮してきたことは拙著『山頂に向かう想像力——西欧文学と日本文学の自然観』(英宝社、1996) の中ですでに述べた通りであるが、おおよそこのような血なまぐさい死に関わるようなことにはおぞけをふるう代助であってみれば、処刑されるものの心理解剖の話は、願い下げのはずである。ところが漱石はここの所で、代助に最も嫌う話を読ませている。なぜか。

これに答える前に、まずはこの物語を読み終えた直後の代助の反応を引用しておこう。「代助の頭は最後の幕で一杯になっている。」(同)

> 海から日が上(あが)った。彼らは死骸を一つの車に積み込んだ。そうして引き出した。長くなった頚(くび)、飛び出した眼、唇の上に咲いた、怖ろしい花のような血の泡に濡れた舌を積み込んで元の路へ引き返した。・・・・・・
>
> 代助はアンドレーフの『七刑人』の最後の模様を、此所まで頭の中で繰り返して見て、竦(すく)と肩をすくめた。こういう時に、彼が尤も痛切に感ずるのは、万一自分がこんな場に臨んだら、どうしたら宜かろうという心配である。考えると到底死ねそうもない。といって、無理にも殺されるんだから、如何にも残酷である。彼は生の欲望と死の圧迫の間に、わが身を想像して、未練に両方に往ったり来たりする苦悶を心に描き出しながら凝と坐っていると、背中一面の皮が毛穴ごとにむずむずして殆ど堪らなくなる。(四)

代助の反応は、ざっとこのようなものである。さて、ではなぜこのような恐ろしい物語を代助に読ませるのかという先ほどの問であるが、これはやがて来る三千代をめぐる代助のまさに「生の欲望」と「死の圧迫」の間の「苦悶」を予示する比喩的表現であるというのが、その答えである。一人の愛する女を手に入れるのがそれほどまでに恐ろしいものであることを漱石は暗示している。

この一人の愛する女をめぐっての二人の男（代助と平岡）の確執がやがて嫉妬となり、白昼夢に恋敵を殺す場面を想像するまでになると、漱石の『彼岸過迄』（明45）の「須永の話」が出来上がることになる。

「須永の話」の中で漱石は、今度はアンドレーエフの小説『ゲダンケ』を持ち出し、それを千代子の恋敵にあたる高木にちょうど嫉妬をはじめた須永が読む場面を描くのである。しかもその本を須永が手にする経緯がおもしろい。たまたま書架の整理をしていたときに須永が、文学好きの友達に借りて久しく返すのを忘れていた「妙な書物、を偶然棚の後から発見した。それはむしろ薄い小型の本だったので、つい外のものの向側へ落ちたなり埃だらけになって、今日までぼくの眼を掠(かす)めていたのである」（「須永の話」二十六）[2] という。

須永はふだんから自分を「小説中の人物になる資格がとぼし」（同二十七）く、思慮が勝って行動に出られない男と見做していたので、友達にそれを借りたときにはほとんど興味がなく、打棄っておいたものである。

ところが、である。

・・・何の気も付かずにその『ゲダンケ』を今棚の後から引き出して厚い塵を払った。そうして見覚のある例の独乙字の標題に眼を付けるとともに、かの文学好の友達と彼のその時の言葉とを思い出した。すると突然どこから起こったか分からない好奇心に駆られて、すぐその一頁を開いて初めから読み始めた。中には恐るべき話が書いてあった。（同二十七）

これは漱石による須永と『ゲダンケ』との遭遇への巧みな導入である。「何の気も付かずに」とか、「すると突然どこから起こったか分からない好奇心に駆られて」とか、他人ごとのようなことを須永は言っている。だがそれもそのはず、須永は未だ自分の心がはらんでいる恐ろしい感情の存在に気づいていないからである。その感情の存在を須永に気づかせるのが、小説『ゲダンケ』というわけである。

その「恐るべき話」を須永、否、漱石はなぜだか長々と書いている。「なぜだか」といったが、勿論漱石には目論見がある。それは話の中身（長いがすべて）の引用のあとにしよう。

> 或女に意のあった或男が、その婦人から相手にされないのみか、かえってわが知り合いの人の所へ嫁入られたのを根に、新婚の夫を殺そうと企てた。但しただ殺すのではない。女房が見ている前で殺さなければ面白くない。しかもその見ている女房が彼を下手人と知っていながら、何時までも指をくわえて、彼を見ているだけで、それより外にどうにも手の付けようのないという複雑な殺し方をしなければ気がすまない。彼はその手段として一種の方法を案出した。ある晩餐の席へ招待された好機を利用して、彼は急に劇しい発作に襲われたふりをし始めた。傍から見るとまるで狂人としか思えない挙動をその場で敢てした彼は、同席の一人残らずから、全くの狂人と信じられたのを見済まして、心の内で図に当った策略を祝賀した。彼は人目に触れやすい社交場裡で、同じ所作をなお二、三度繰り返した後、発作のために精神に狂の出る危険な人物という評判を一般に博し得た。彼はこの手数（てかず）の懸った準備の上に、手の付けようのない殺人罪を築き上げるつもりでいたのである。しばしば起こる彼の発作が、華やかな交際の色を暗く損ない出してから、今まで懇意に往来していた誰彼（だれかれ）の門戸が、彼に対して急に固く鎖されるようになった。けれどもそれは彼の苦にするところではなかった。彼はなお自由に出入りの出来る一軒の家を持ってい

た。それが取りも直さず彼のまさに死の国に蹴落そうとしつつある友とその細君の家だったのである。彼は或日何気ない顔をして友の住居を敲いた。其所で世間話に時を移すと見せて、暗に目の前の人に飛び掛かる機を窺った。彼は机の上にあった重い文鎮を取って、突然これで人が殺せるだろうかと尋ねた。友は固より彼の問を真に受けなかった。彼は構わず出来るだけの力を文鎮に込めて、細君の見ている前で、最愛の夫を打ち殺した。そうして狂人の名の下に、瘋癲院に送られた。彼は驚くべき思慮と分別と推理の力とを以て、以上の顚末を基礎に、自分の決して狂人でない訳をひたすら弁解している。かと思うと、その弁解をまた疑っている。のみならず、その疑いをまた弁解しようとしている。(同二十七)

須永はこの長々とした話の後で、「彼は必境正気なのだろうか、狂人なのだろうか、――僕は書物を手にしたまま慄然慄然として恐れた」(同) と感想を漏らしている。我々普通の読者がこの物語を読んで、良心のかけらの一つもない主人公ドクター・ケルジェンツェフの殺人を恐れないわけではない。ところが、こと須永が特にそれに心を捉えられ、恐れを募らせるには彼なりの理由がある。それは常に「胸」(ハート) を「頭」(ヘッド) で押さえ付けながら命を削って生きている須永にとって (この点では須永は『それから』の主人公代助の後継者であり、『行人』(大1) の一郎に先行する人物である)、『ゲダンケ』の主人公のように「理と情との間に何らの矛盾をも扞格をも認め」(同二十八) ずして、復讐を成し遂げるのは、「大いに羨ましい」(同) いことであると同時に「汗の滴るほど恐ろし」(同) いことだからである。須永はさらにこうも思う。

出来たらさぞ痛快だろうと思った。出来した後は定めし堪えがたい良心の拷問に逢うだろうと思った。(同)

この引用は、漱石の『こころ』を考えるうえで大変重要であるので、よく覚えておいて頂きたい。目下はこの引用を云々する前に、これに続く須永の重大な意味を持つ「白昼夢」を先に検討することにしよう。というのは、須永の感想はこれだけではないからである。つまり小説の中の出来事として主人公ドクター・ケルジェンツェフの殺人を羨ましがったり、恐れたばかりではないのである。この小説を読んだことが引き金となって、彼自身実際に許婚者である千代子に対するライバルとして姿を現わした高木への嫉妬の念が白日夢の中で彼を殺人鬼に変貌させるのを知り、愕然となって夢から醒めるのである。

これも『こころ』を考えるうえで大変重要であるから、少し長いが引用しよう。

けれどももし僕の高木に対する嫉妬がある不可思議の経路を取って、向後今の数十倍に烈しく身を焼くならどうだろうと僕は考えた。しかし僕はその時の自分を自分で想像することが出来なかった。始めは人間の元来からの作りが違うんだから、とてもこんな真似はし得まいという見地から、直ぐこの問題を棄却しようとした。次には、僕でも同じ程度の復讐が充分遣って除けられるに違いなという気がし出した。最後には、僕のように平生は頭と胸の争いに悩んで愚図ついているものにして始めてこんな猛烈な兇行を、冷静に打算的に、かつ組織的に、逞ましゅうするのだと思い出した。僕は最後に何故こう思ったのか自分にも分からない。ただこう思った時急に変な心持に襲われた。その心持は純然たる恐怖でも不安でも不快でもなく、それらよりは遥かに複雑なものに見えた。が、纏って心に現われた状態からいえば、丁度おとなしい人が酒のために大胆になって、これなら何でも遣れるという満足を感じつつ、同時に酔に打ち勝たれた自分は、品性の上において平生の自分より遥かに堕落したのだと気が付いて、そうして堕落は酒の影響だからどこへどう避けても人間としてとても逃れるこ

とは出来ないのだと沈痛に諦めを付けたと同じような変な心持であった。僕はこの変な心持とともに、千代子の見ている前で、高木の脳天に重い文鎮を骨の底まで打ち込んだ夢を、大きな眼を開(あ)きながら見て、驚ろいて立ち上った。(同二十八)

須永は白日夢の中でドクター・ケルジェンツェフになる。だがこれはあくまでも夢の世界のことであって、須永は実際にはドクター・ケルジェンツェフには、少なくとも小説に描かれている限りでは、ならない。だがなる可能性は十分に残している。そこが問題なのである。

はっきり言ってしまおう。筆者が言いたいのは、ここにこそ、この上記二つの引用にこそ、漱石『こころ』の世界があるということである。『彼岸過迄』で須永の見た白日夢が、実際の事となって現われるのが『こころ』である。勿論『こころ』の先生は直接手を下して友人Kを殺したわけではない。だが先生は嫉妬に駆られたあげく、相談を受けたKに対しては「精神的に向上心のないものは馬鹿だ」(「先生と遺書」四十一)と「復讐以上に残酷な」(同)言葉を投げつけ、まるで「狼が隙を見て羊の喉笛へ食らい付くように」(同四十二)して、そのライバルの命を屠る、と同時にKを出し抜いて奥さんにお嬢さんとの結婚を申し込む。それを知ったKは、これがすべての原因ではないにしても、直接の誘因として、自殺することになるのは周知の通りである。

そして須永がかつて想像したように、先生は「出来(でか)した後は・・・堪えがたい良心の拷問に逢う」ことになるのである。

＊　　＊

漱石がアンドレーエフの『ゲダンケ』(ドイツ語で「思想」の意)を独訳(あるいは英訳)で読んだことは、上記のように『彼岸過迄』を見れば分かる。そしてそれが『彼岸過迄』の須永の話だけでなく、須永の白昼夢が現実の姿を帯びて『こころ』に登場するのを我々は見てきた。アンドレーエフの

この小説が如何に深く漱石の『こころ』と関わりを持っているかが想像できよう。

ここでもう一つ、『ゲダンケ』と『こころ』の関わりで、重要と思える事実を指摘しておきたい。これは漱石の注釈者の知らない事柄ではない。『彼岸過迄』の須永の話に登場するアンドレーエフと『ゲダンケ』の註、たとえば岩波文庫の註には、漱石の蔵書には独訳の『ゲダンケ』があること、また『それから』の中で漱石が『七死刑囚物語』に言及していることにも触れ、さらに親切に『ゲダンケ』の英訳は“Thought”であり、明治四二（1909）年六月に上田敏が『心』と題して春陽堂から刊行していることも印している。

『ゲダンケ』の英訳は“Thought”であるという点についてはのちに訂正するが、その他の点では注釈者は、事実を述べているだけであって、漱石の『こころ』と上田敏の訳『心』との関係に注目せよなどとはなにも言っていないし、そのヒントらしきものも示唆してはいない。が、筆者が注目するのは、上田敏による訳『心』との関わりである。漱石はおそらく上田敏の訳『心』も読んだのではないだろうか。あるいは少なくともその訳の出たことは知っていたのではないかと筆者は想像する。

敏が先か、漱石が先かは知らぬが、敏は『心』に付けた序文で「譯者は千九百三年（明治三十六年）の春何気無く、アンドレイエフの短篇集を東京の一書肆で購つて読んだ」と記している。漱石が『それから』を朝日新聞に連載したのは明治四十二年（1909）年六月から十月にかけてであるから、その頃までには少なくとも『七死刑囚物語』は読んでいたし、『ゲダンケ』も読んでいたものと思われる。(3)

どちらが先かはどうでもよい。筆者が注目するのは、漱石が朝日紙上では（大正三年四月から八月にかけて）漢字の『心』（ルビで「こころ」あるいは「こゝろ」としてあった）としたものを、単行本にする際に、今の平仮名に変更し、しかも副題の「先生の遺書」も削除してしまったという事実である。アンドレーエフの『心』が精神病院に入れられたドクター・ケルジェン

ツェフの精神医に宛てたいわば<殺人者の手記>であり、漱石の『心』の副題が「先生の遺書」であったという事実である。これらは何を意味するのであろうか。筆者の想像するところ、これは漱石が敏の訳『心』との一致を避け、単行本ではわざと平仮名に変更し、しかも副題も<殺人者の手記>を思わせるような「先生の遺書」で一貫するのはやめて、現行のように「上　先生と私」「中　両親と私」「下　先生と遺書」の三つの部分に分け、最初の副題を最後にわずかに残したのではなかったろうか。そうすることで、上田敏を介しての両作品の関わりを読者に悟らせるのを、わざと避けようとする意図が漱石にあったのではないかと思える。

だが、これはあくまでも推測にしか過ぎない。こうした推測よりも『こころ』という作品そのものの持つ意味が問題である。漱石は『こころ』の広告文において、「自己の心を捕へんと欲する人々に、人間の心を捕へ得たる此作物を奨む」(4) という。そして「人間の心」といえば、漱石初期の随筆「人生」(明治29年) を思い起こすのは筆者だけではあるまい。漱石はそこで「狂気」について、「因果の大法を蔑(ないがしろ)にし、自己の意志を離れ、率然として起こり、驀地(ばくち)に来るもの」(5) と定義し、これは他人に起こる現象だけではなく、そういう本人にも起こり得ることで、人間というのは「何時にても狂気し得る資格を有する動物」であることを承知せよというのである。

突然自分の意志とは無関係に予期せぬときに起こるもの、それが「狂気」であるという漱石は、さらにこうも言う。「良心は不断の主権者にあらず、四肢必ずしも吾意志の欲する所に従はず、一朝の変俄然として己霊の光輝を失して、奈落に陥落し、闇中に跳梁する事なきにあらず、是時に方(あた)つて、わが身心には秩序なく、系統なく、思慮なく、分別なく、只一気の妄動するに任ずるのみ・・・」

また「人心の如何に善にして、又如何に悪なるか」は、ひとり他人ごとではなく、自らの「悪人たるを承知」せよといい、「不測の変外界より起こり、思ひがけぬ心は心の底より出で来る」のが人間という厄介な動物であっ

て、これを写すのが小説の使命なのだというのである。

ここに漱石が小説『こころ』で描いた人間の心が、集約的に定義されている。これ以上付け加えることはないであろう。そしてこの日常茶飯事の間に、突如として善人が悪人に変わり、正気が狂気に陥る恐ろしい人の心というものをもっぱら描いたのがエンドレーエフの小説であから、漱石がアンドレーエフに関心を抱かないはずがない。

『ゲダンケ』は勿論のこと、註の漱石蔵書目録に挙げた他の作品、例えば、一世を風靡した長谷川二葉亭訳の『血笑記』は、日露戦争に従軍した兵士が、非日常の世界の恐怖から、狂気に陥るさまを見事に描いたものだし、また『ワシリー・フィヴェイスキーの一生』も、最愛の子供を亡くしたことで、突然狂気に見舞われる妻と夫の牧師がまさに残忍な運命に翻弄される物語である。

本論の最初に漱石の小説『それから』の代助が『七死刑囚物語』を読むくだりを引用した中に、処刑された者の「唇の上に咲いた、恐ろしい花のような血の泡・・・」とあるが、『血笑記』のすべてを支配する血の色、つまり「赤」こそ、何を隠そう、まさに小説『それから』を塗りつぶし、代助を真っ赤な狂気へと駆り立てていく血の色にほかならない。『それから』はアンドレーエフの『七死刑囚物語』のみならず、『血笑記』をも内包した作品であるといってよい。

話が少し脇に逸れたが、アンドレーエフ『心』の訳者上田敏が付けた序の中で、先ほどから問題にしている点、つまり、〈日常茶飯事の間に、突如として善人が悪人に変わり、正気が狂気に陥る恐ろしい人の心〉ということについて敏は、

> アンドレイエフの名は西欧羅巴の文界に喧伝(けんでん)しなかつたが、人間胸裏の底知らぬ湖を示して、そこに碧潭がある、深淵がある、表は可愛らしい漣の小じわが見えても、底には恐ろしい渦が湧きかへつているという意を、

此作者ほど十分に描いてゐる人は少ないと思った。

と述べ、また尋常の人が突然狂気に陥ることについて、

日常の事件中、よく考へれば非常に悲惨な、幽玄な由々しい事が在るのを示すので、即ち生死の大不可思議に潜んでゐる驚心駭目の事実を抽出して読者に示す・・・心理の描写、殊に病理的心理の描写が得意の題目である、

という。

さらにこれをまとめて敏は、「尋常の場合、普通の人間の話をして、世に珍しい新戦慄を創作し」たのがアンドレイエフの特色であるという。これははからずもさきほど挙げた漱石の「心」の定義と軌を一にしている。

このようなわけで、本来ならば『彼岸過迄』の須永の白昼夢より、それを現実にしてしまった『こころ』のほうにおいてこそ、アンドレーエフの『心』への言及が、漱石によってなされてしかるべきではなかったか。

＊　　＊

もう少し両作品のテクストを細かく検討していけば、二つの小説がさらに密接な結び付きを持つものであることが知られるであろう。

たとえば「永久に復活し」ないという先生の「良心」(「先生と遺書」四十六)[6] の場面を見てみよう。先生は友人Kに内緒で奥さんにお嬢さんを呉れるように申し込み承諾を得た後、散歩に出て、万世橋を渡り、明神の坂を上がり、本郷台に出、それからまた菊坂を下りて、しまいに小石川の谷へ下りたという。そして先生はいみじくもその足跡を称して「いびつな円を描いた」という。「いびつな円」とは先生の歪んだ「良心」にほかならないわけで、それは先生がこの散歩の間Kのことは何故だかほとんど考えなかったこ

とに起因する。

先生は「私」への遺書の中で当時を振り返ってこのように言う。

・・・もしKと私がたった二人曠野(こうや)の真中にでも立っていたならば、私はきっと良心の命令に従って、その場で彼に謝罪したろうと思います。しかし奥には人がいます。私の自然はすぐ其所(そこ)で食い留められてしまったのです。そうして悲しい事に永久に復活しなかったのです。(同)

先生はこの「良心」を「自然」と呼び、また「天」(同四十七) とも呼んでいる。この「良心」=「自然」=「天」をいわばメフィストフェレスに売り渡してしまった先生は、まさにドクター・ケルジェンツェフに等しい存在となる。上田敏訳の『心』に従って、良心を無くしたドクター・ケルジェンツエフの嘆きを聴こうではないか。

ケルジェンツェフ先生こそは嫉妬に駆られ、あるいは復讐心に駆られて、メフィストフェレスに良心を売り渡してしまった哀れな存在である。

自分が正気だか狂気だか分からなくなってしまったケルジェンツェフは看護婦のマアシャに助けを求めてこう言う。否、このように手記に認(したゝ)めるのである。

・・・質朴なお前の家の暗い隅にはお前に大事な誰だかいるだろうが、自分の室には何にも無い。久しい前に死んで了つた。墓の上に立派な石塔を建てゝ遣った。マアシャ、死んで了つたよ、死んで了つたよ。もう決して生返って来ないんだ。(7)

「質朴なお前の家」とは心であり、「お前に大事な誰だか」とは「良心」にほかならない。「自分の室には何にも無い。久しい前に死んで了つた。・・・もう決して生返って来ないんだ。」とはケルジェンツェフ先生の永遠の良心喪失をいう。まさに漱石の『こころ』の先生の「永久に復活しな」い

「良心」とパラレルをなす。

またケルジェンツェフが建てる墓の上の立派な石塔は、先生がKの供養のために建てる立派な墓に相当する。つまりは無くした先生の良心の象徴にほかならない。

先生の細君はKの立派な墓を褒めるが、これはまるで『三四郎』の終わりに「森の女」の肖像画を褒める美禰子のなにも知らない夫に等しい。いずれも褒められた当の本人は「罪」を自覚し、「運命の冷罵」（同五十一）を感ぜずにはいられない。

『こころ』の先生は「人間の罪」（同五十四）を意識する。かつて先生を「欺む」（同五十二）いた叔父と同様に、自分が人を欺むく人間であることを知る、つまり善人があるとき突然悪人に変貌する事のあるのを知った先生は、「人間の罪というものを深く感じた」（同五十四）という。

ドクター・ケルジェンツェフも同様である。かつては「自分は自己の主（あるじ）にして、やがて全宇宙の主であった。所が全然、欺されたのである。心は不忠にも女が欺すように欺した。わが城はわが牢となった。敵は城内から襲来した。」（同訳書、350頁）

ケルジェンツェフは自分で自分の心を支配しえなくなった、つまり「狂」の存在を知ったのである。

ドクター・ケルジェンツェフはこうも言う。

> 如何なる強健の人が僕を援けに来るだろう。誰も来まい。この孤独な憐れな、絶望沈淪した「我」を提げて僕が跪く可き永遠の或物は何処に居る。居ない、居ない。（同訳書、351頁）

つまり、「跪く可き永遠の或物」とは神のことであろうが、神にとって代わったのが近代人の「心」であるから、神はいない。だがその「心」が持ち主を欺くところに近代人の悲劇がある。だからケルジェンツェフは手記の最

後に「神ばかり多く居て、唯一永遠のひとりの神が居ない此咀はれた全地球云々」(同535頁) というのである。

これはひとりドクター・ケルジェンツェフの嘆きではない。『こころ』の先生の嘆きもまさにここにある。神にとって代わった近代人の心がその持ち主を欺き、裏切る物語、それが両作品に共通のテーマではないであろうか。明治30年代後半から40年代そして大正の初めにかけて、アンドレーエフが、自然主義の定着した日本の文壇に新たな方向性を示唆するものとして、漱石だけではなく、鷗外、敏その他多くの文人の注意をひいたことは、アンドレーエフの訳者および解説者のみんなが証言するところである。(8)

先ほど自分の心をその持ち主が支配できなくなるもどかしさを訴えたケルジェンツェフのパセッジを引用したが、最後に、同様に彼の心を今度はいくつかの部屋のある家に喩えている箇所を引用しよう。

> ・・・数多くの室を具へた一棟の家があると想象してみ給え。それで君はその一室に居て、全家屋を占領してゐると思ふ。豈科らんや、自分の周囲の他の室にも人が住んで居る。うん、人が居る、妙なえたいの知れぬ人か物かゞ居て此の家を持つていると、急に気が付く。何物だらうと知りたいが、戸は閉つている。壁一重の向には音もせぬ。声もせぬ、而も同時にこの黙然(もくねん)たる戸の彼方で、君の運命が将に決せられむとしているのだ。(同訳書、338頁)

この家はまさに人の心そのものではないか。「我」の意識のみでもっては支配し得ない不可思議な心を、このようにいくつかの部屋と得体の知れない住人に象徴させているのである。これはまさに漱石の『こころ』の先生の心であると同時に、その心を象徴する先生の住む家の部屋割そのものではないだろうか。先生が下宿し占有している部屋、その隣に引っ越して来るKの部屋、奥さんとお嬢さんの部屋、応接間、玄関等々。

特に先生がKを下宿させに連れて来たとき、奥さんが止めておくようにいったのは印象的である。それを聞き入れないで、Kの占有することになる部屋は、先生のそれと「襖」一枚を隔てた部屋となるのは極めて示唆的である。「襖」一枚でありながら、相手が何をしているのか分からない。そして疑心暗鬼に駆られる。学校から帰って来るとKの部屋でお嬢さんの話声がするのを聞きつける先生にとって、家の部屋の構造は極めて暗示的である。つまり今までひとりで占拠していた家（つまり自分の心＝お嬢さん）に、別の得体の知れないものが部屋を作って入りこんで来たことになる。まさにケルジェンツェフの言う通りである。

Kが自殺する前後の先生とKとを隔てる一枚の「襖」の役割りはすでに多くの研究者が述べていることであろうから、多くはいわないが、アンドレーエフの『心』との深いパラレルを抜きにしては語れない気がするのは筆者ひとりだけであろうか。

さて、アンドレーエフのいくつかの小説と、漱石のいくつかの小説の関わりあいを、そのテーマの類似性から述べてきた。最も気にかかっていた上田敏訳の『心』との関連も推測の域を出ないが、誰も言っていないようであるから述べることにした。今後の研究ではっきりしたことが分かれば拙論も無駄ではなかったことになろう。

（1997・3・26）

補遺

上記拙論の最後に、「上田敏訳の『心』との関連も推測の域を出ないが云々」と書いたが、こののち、驚くべきことに、筆者とほとんど同題名で論文がかつて書かれていることを発見したのでそのことの報告と、それにも関わらず、やはり拙論はこれで十分意味を持つものとして読まれる資格を有すると判断したことを印しておかねばならない。

その論文とは、剣持武彦氏の《夏目漱石「こころ」と上田敏訳アンドレィエフ「心」》(『道』、世代群評社、昭和56年１月）である。それの発見とコピーの入手過程については註を参照されたい。(9)

剣持氏がその論文の中でどのようなことを言っておられるのか、筆者のようにその論文の実物を手にするのが困難な人の為に、おおよその内容をかいつまんで記しておきたい。

拙論の冒頭に、筆者はいまではアンドレーエフの名や小説を知る人は少ないのではないかと書いたが、剣持氏は筆者の知らなかったことを色々と記しておられるので、そういう事実があったのかと、またしても驚かされた。それは上田敏訳「心」の誤訳論争をめぐってのものである。

敏がその訳の定本としたのが、ド・ヴィゼワとペルスキーによるフランス語訳 *L'Epouvante*（恐怖）所収の La Pensée（思想）であった事実が島田謹二氏の手で調べられたことが、『定本上田敏全集』第二巻解説の中に記されてある。

剣持氏が指摘している事実とは、この敏の訳「心」が「無名通信」(明治42年７月15日）の「翻訳界の恥辱」という中で批判の槍玉に上がったことである。無名子というその批評家は本来ロシア語のタイトル「ムイスリ」(思想）こそこの小説のテーマを示唆するものであるのに、敏がそれを「心」とかってに訳したのは不当であるというわけであった。つまりアンドレーエフはこの小説の中で「自由思想を象徴化した」がために「思想」と名付けたのを、敏が勝手に変えたのはけしからんというのである。

これに対して敏は「小生の翻訳」(読売新聞、明治42年８月１、２日）を書いて、「思想」を「心」と訳したのは「種々勘考上・・・多少の苦心を経ての事である」と弁明しているが、その理由は挙げていないと剣持氏は語っている。そして剣持氏は主人公ケルジェンツェフが己の心の自由のみを絶対視する「自我絶対主義者」であることから、敏がそれを「心」と訳したのは間違いではなかったと敏を弁護し、ただそうした心の絶対視がやがては己自

身の心を殺すことになり、悲劇を招くのがこの小説であると説明する。

さらに剣持氏は、漱石が小宮豊隆を師としてドイツ語の勉強（明治42年3月7日から4月9日にかけて）にドイツ語訳アンドレーエフの「七刑人」を用いており、筆者が指摘したように、それがやがて『それから』の中に言及された事実をとりあげ、漱石が如何にアンドレーエフに傾倒していたかを指摘している。

そしてこのような下地のある漱石が敏訳の「心」を読まないはずはない、そして漱石の『こころ』はその訳を心のどこかにおいての創作であった可能性が極めて強いことを剣持氏は推論するのである。

だが結局アンドレーエフの小説を利用はするが、それとは逆に、エゴを超越せんとする主人公を『それから』の代助、『行人』の一郎、そして『こころ』の先生へと継承発展させたのが漱石であって、そこが漱石とアンドレーエフとの決定的な相違であることを剣持氏は強調している。

そして剣持氏は敏訳の「心」と漱石の『こころ』の両テキストの突合わせを行い、決定的な相違はあるものの、両小説の登場人物、状況設定、および人間の心、エゴイズムを描く点では両者にパラレルをなす部分のあることを指摘せんとする。

以下に剣持氏の指摘するパラレルをなす部分をかいつまんで示しておく。

まずは敏訳「心」と漱石の『こころ』との人物設定であるが、「心」の「私」ケルジェンツェフと殺されるアレクシスは親友である。これは漱石『こころ』の先生と親友Kとの関係を想起させる。

徹底した無神論者のケルジェンツェフは「罪」に関して「人間の行為は殆皆罪ではないか」というが、これは漱石『こころ』の先生が、「私」に「恋は罪悪」だと語る部分に重なり合う。ただし、恋の「神聖」であることも認めている点では、先生はケルジェンツェフと違ってるが、ここでは「罪」ということが大切だ。

父の財産に関することで人間不信に陥る事情も両者に共通の点である。ケ

ルジェンツェフの父は金のみを重視する弁護士であり、息子のことは何も理解していない父親だと息子から批判されているが、これは父が死んで財産管理を依頼された『こころ』の先生の叔父の裏切り行為とパラレルをなす。そして両主人公ともにニヒリズムを心の中に涵養していく。

剣持氏のパレラレル指摘の中で筆者も逃していたもので、また最も氏の指摘の適切な箇所が一つある。それはケルジェンツェフが殺人を決行すべくアレクシスの書斎に入るときの心理を描写した部分である。敏訳から引用する。

透明なわが心の斯くも深く、斯くも高いことはこれ迄無かった。わが『我』の斯くも複雑にまた調和して働いた事は今迄無い。自分は神のやうに、視ずして見、聴かずして聞き、思はずして知った。

漱石『こころ』の「先生の遺書」（四十一）より引用する。

私は丁度他流試合でもする人のやうにKを注意して見てゐたのです。私は、私の眼、私の心、私の身体、すべて私と名の付くものを五分の隙間もないやうに用意してKに向ったのです。罪のないKは穴だらけといふより寧ろ開け放しと評するのが適当なくらいに無用心でした。私は彼自身の手から、彼の保管してゐる要塞の地図を受け取って、彼の前でゆっくりそれを眺めることが出来たも同じでした。

やがてケルジェンツェフが文鎮を振り上げて一撃を友人アレクシスに加える場面は、すでに筆者が指摘したように、『こころ』の先生が「精神的に向上心のないものは馬鹿だ」といって「復讐以上の残酷な意味」を持った言葉による一撃を友人Kに加えるのとパラレルをなす。

さらにケルジェンツェフが文鎮による撲打を追い打ちする場面は、先生が

お嬢さんをくれと母親に結婚の申し込みをしたのをKが聞かされ、ショックを受け、やがて自殺に至る経緯とパラレルをなす。

さて小宮豊隆が漱石の『こころ』の先生の遺書を託される「私」のモデルと看做されていたことは森田草平が指摘しているが（『続・夏目漱石』養徳社、昭和18年、11月）、その豊隆が漱石とアンドレーエフを一緒に読んでいたこととは密接な繋がりがあるのではないかと、剣持氏は推論する。

そして最後に氏は、筆者が最も重視した漱石の『彼岸過迄』に於ける漱石の「ゲダンケ」への言及を取り上げ、その粗筋がそっくり紹介されていること、およびそのドイツ語訳は漱石の蔵書目録にも入っていること、そして「この事実は敏訳『心』と併せて本論の裏付けとなろう」と結んでいる。

ただし、筆者が拙論で『彼岸過迄』の須永の話に付与したような、『こころ』に発展する重要な、そして『彼岸過迄』と『こころ』をアンドレーエフの「ゲダンケ」に結び付ける決定的な繋がりの分析（これが拙論のもっとも重要な点である）を、残念ながら剣持氏は欠いていることを指定せざるをえない。

さらに拙論では剣持氏の解釈と決定的に違って、ケルジェンツェフの自我の崩壊に伴う絶対的な「神」への希求とそれを手にすることの不可能な近代人の運命への絶望感も、アンドレーエフが示唆している点も指摘しておいた。短篇「沈黙」や前にも挙げた『ワシリー・フィヴェイスキーの一生』(日本語訳では『信仰』あるいは『救ひなき祈り』）などは、『ゲダンケ』と並びこのことをよく示している。

また剣持氏は筆者の想像したようには、敏訳の「心」というタイトルが漱石の『こころ』を平仮名にさせた要因ではないかというような推論は何もしていないことも指摘しておきたい。だが漱石が敏訳の「心」を読んだであろうことはほぼ確実であるとする剣持氏の指摘は、筆者の推論にはまさにこころ強い味方である。

これまで剣持氏の論のおおよその所を紹介したが、まさに「先立ちはあら

まほしきことなり」で、筆者が無学にして看過していた事実の指摘に啓発されたところは多々あるし、また拙論中に比較検討のため取り上げた箇所以外にも、両作品の関係を示唆するパッセージを指摘されるなど、剣持氏の論に感謝せざるをえない。

できうれば、拙論と剣持氏の論を併せて読んで頂きたい。そうすれば、漱石が如何に彼の一連の作品を、我々の想像以上に、アンドレーエフのものと深い関わりを持たせて描いているかが納得されるであろう。

最後に、剣持氏もこれまで他の誰も気づかないでいると思える事実をひとつ述べておきたい。それは、註の漱石蔵書目録の（2）に挙げておいたが、東北大学付属図書館の漱石文庫の中に、英訳で、Leonidas Andreiyeff, *A Dilemma : A Story of Mental Perplexity* ; tr. by J.Cournos, Philadelphia, Brown Brothers, 1908（Modern Auther's Series）というのがあり、筆者がこの（1997）6月に同図書館で調べた結果、これがなんと問題の『ゲダンケ』、つまりロシア語原書『ムイスリ』の英訳であることが判明したことである。(10) したがって、岩波文庫の『こころ』の註にある『ゲダンケ』の英訳は“Thought”であるというのは、意味そのものは「思想」であるからその通りだが、英訳の本の題名としては誤りであることを付記しておく。

追記

以上のおおよそのことは、筆者が日本比較文学会関西支部例会での講演（1997・12・13、於神戸女学院大学）で話した通りである。そのとき桃山学院大学の国松夏紀氏（ロシア文学専攻）から、ドクター・ケルゼンツェフの頭文字のKが『こころ』の友人のKになったのではないかという指摘と、かつて国松氏が早稲田大学の大学院に在籍中に、恩師の新谷敬三郎氏から、「漱石の『こころ』はアンドレーエフの『心』だ」と聞かされたことがあるという話をうかがったという逸話も、剣持氏のものと同様に、こころ強い先輩の発言として、追記しておきたい。

註

（1）『それから』（岩波文庫）。以下同小説よりの引用はすべてこの版による。

（2）『彼岸過迄』（岩波文庫）。以下同小説よりの引用はすべてこの版による。

（3）以下に掲げる漱石蔵書目録の6、7を参照されたい。なお訳本で身近かにあるものとして筆者の母校天理大学付属図書館所蔵のものを挙げておいた。

漱石蔵書目録

Andreiyeff (L)

1　*Silence*. Trans. By J. Cournos. Philadelohia: Brown Bros., 1908（Modern Author's Series）（東北大学附属図書館所蔵）。中村春雨譯『沈黙』（杉本梁江堂、明治42年11月）（天理大学附属図書館所蔵）。

2　*A Dilemma : A Story of Mental Perplexity*. Trans. By J. Cournos. Philadelphia: Brown Bros., 1910（Modern Author's Series）（東北大学附属図書館所蔵）

Andreijew (L)

3　*Der Gouverneur*. Uebers von A. Scholg Berlin : J. Landyschnikow.（東北大学附属図書館所蔵）。『知事』原作出版（1903）（明治39）

4　*Das Leben Varter Wassili Fiweiski's*. Uebers won G. Polonski: J. Landyschnikow.（『ワシリー・フィヴェイスキーの一生』）（1903）（明治39年）（中村春雨譯『信行』、杉本梁江堂、明治42年11月あるいは伊藤欽二譯、大正10年11月『救ひなき祈り』（両訳とも天理大学附属図書館所蔵）。

5　*Das rote Latchen*. Uebers von A. Sholg Berlin "Snanije", 1905（明治38年）長谷川二葉亭『血笑記』（赤い笑い）（明治41年7月、易風社）（天理大学附属図書館所蔵）。

6　*Der Gedanke und andere Novellen*. Uebers von Elisawetingkaya & J.George. Munchen : A Langen, 1903（明治36）（上田敏訳『心』、春陽堂、明治42年）

7　*Die Geschichte von den Sieben Gehenlten.* Uebers von L. Wilbeck. Munchen : R Piper & Co., 1908（明治42年）（東北大学附属図書館所蔵）『七死刑囚物語』（原作出版1908）

8　*Die Lünge.* Uebers von N. Hornstein Dresden: H. Minden（東北大学附属図書館所蔵）『嘘』あるいは『偽り』

（4）『漱石全集』第十六巻（岩波書店、1995）所収。

（5）『漱石全集』第十六巻（岩波書店、1995）所収。以下同随筆よりの引用はすべてこの版による。

（6）『こころ』（岩波文庫）。以下同小説よりの引用はすべてこの版による。

（7）『定本上田敏全集』第二巻（教育出版センター、1298）、143—44頁。以下同小説よりの引用はすべてこの版による。

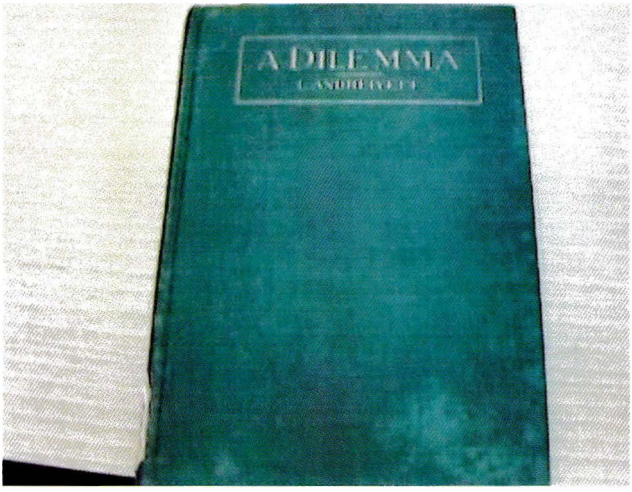
（8）中村春雨譯『信仰』の「序」、伊藤欽二譯『救ひなき祈り』の「序文」、あるいは『鷗外選集』第十六巻（翻訳小説一）（岩波書店、1980）で、鷗外訳アンドレイエフ「歯痛」に関する小堀桂一郎の解説等を参照されたい。

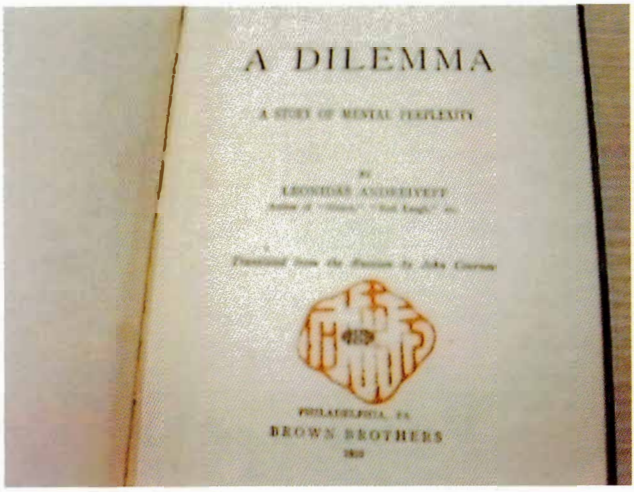
（9）これは筆者が『こころ』の作品論を少しも調べずに勝手に誰もこのテーマでは述べていないと判断したわけではないことを、最初に弁明しておかねばならない。『漱石作品論集成第十号『こころ』（桜楓社、1991）、『国文学——漱石『三四郎』と『こゝろ』の世界』（学燈社、昭和56年10月号）など調べてみたが、同テーマの論文は見当たらなかった。だが、平川祐弘・鶴田欣也編『漱石の『心』どう読むか、読まれてきたか』（新曜社、初版第3刷、1994）所収斉藤恵子氏の「『心』は日本でどのように読まれてきたか」の中で、剣持武彦氏が《夏目漱石「こころ」と上田敏訳アンドレィエフ「心」》という論を書いていることに、そのタイトルだけではあるが、言及していることを発見して驚いた。

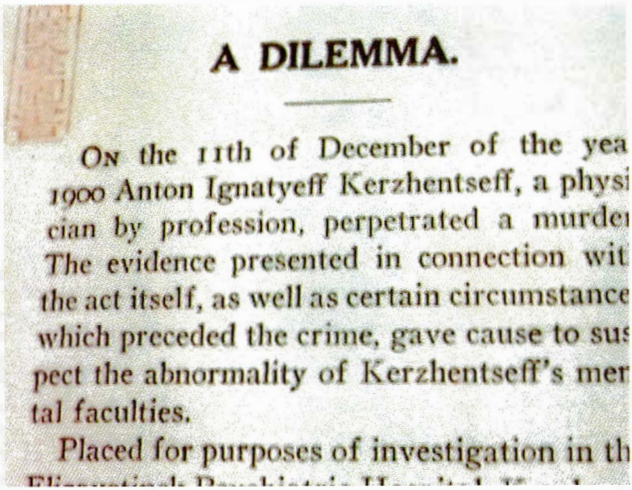
自らの不注意を恥じるとともに、それでは剣持氏のその論文がいつどこに掲載されたものであるのかを（斉藤恵子氏は触れていないので）あれこれ調べた結果、上記『国文学——漱石『三四郎』『こゝろ』の世界』のなかの漱石

研究文献目録より、それが『道』という雑誌（昭和56年1月）に掲載されていることがわかった。そこで筆者の勤務する近畿大学の中央図書館閲覧課に頼んで、どこの出版物なのか探してくれるよう、そして見つかれば複写をしてくれるよう依頼した。それが4月の初めであったが、八方手を尽くして探してくれたがなかなか見つからない。『道』という名の雑誌はかなりの数があって、なかなか特定できないでいたが、やっと探し当てたコピーが筆者の手に落ちたのは、依頼から20日ほど経ってからであった。出版社は東京の世代群評社で、そのコピーは愛知大学豊橋図書館のものであった。

(10) 註（3）の漱石蔵書目録の2に挙げた英訳がそれである。東北大学付属図書館の許可を得て、表と内表紙および本文の冒頭部分の写真を掲げておくので参照されたい。







A DILEMMA.

On the 11th of December of the yea
1900 Anton Ignatyeff Kerzhentseff, a physi
cian by profession, perpetrated a murde
The evidence presented in connection wit
the act itself, as well as certain circumstance
which preceded the crime, gave cause to sus
pect the abnormality of Kerzhentseff's men
tal faculties.

Placed for purposes of investigation in th